人物評伝

Charles C. Price

大 饗 茂*

New York のマンハッタンの北部にコロンビア大学があるが、その数町北に Hudson 河をまたいだ George Washington Bridge という大きな橋がある。この橋を渡ると New Jersey で、15 マイルほど西に向って走ると Pasaic という小さな郊外の街に入る。この街に住む中流階級のクエーカーの家庭の長男として Charles C. Price, 3rd が生まれたのは海をへだてたヨーロッパでの雲行がそろそろあやしくなってきた 1913 年であった。電気技師をしていたお父さんの Charles C. Price, Jr は早くから健康を害して若くして引退したが、それから遊びで始めたチンチラの飼育がずいぶんあたりなどして満ちたりた平和な生活であったようだ。ところが若い息子 Charles の 12 才の時に好奇心にかられて火薬遊びをしていたいへんな不幸がやってきた。今まできき手だった右手が手首からとんで行ってしまったのである。お父さんに似て科学の好きな Charlie の手がなくなってこれから先どんなことになるかいちばん心配したのはお母さんである。けれども若い Charlie はその後ぐち一つこぼさず、使いなれなかった左手と丸坊主になった右手をフルに使って化学の実験でも野球でもテニスでも誰にも負けずにやってのけたし、家族でいつも出かけるセーリングにはいちばん頑張った。そばで見守ってきたお母さんが始終 Charles の努力には頭が下る思いだったと私に話されたことがある。当時クエーカーにも保守派 (Orthodox) と進歩派 (Hicksite) に分れており、ブライス一家は進歩派に属していたので、その派の大学であった Swarthmore College に進んだ。クエーカーの学校というだけでなく当時から小さいけれど最も優秀な college として知られ、卒業生の数の割で行くと最も多く一流の学者を輩出した学校といわれている。当時

アメリカは不況のどん底であり進歩的な Swarthmore の学生はずいぶんと考えたであろうし、恵まれた彼らの社会的使命を感じたことであろう。若い Charlie はことのほか鋭敏にそれを感じていたに違いない。フィラデルフィアの郊外の Lansdown に住む、その後奥さんになったガールフレンドの Mary Elma の家や、彼女のお父さんが日本委員会の委員をしていたこともあるフィラデルフィアのクエーカーの集まりで、日本や中国のことを聞かされて強い印象を受けたのもそのころである。

1934 年にクラスのトップで Swarthmore を卒業するとすぐに Harvard 大学に行き、当時まだ若かった Fieser 教授に学んだ。そのころ Harvard で研究室はちがったが、いっしょだった仲間には F. H. Westheimer 教授がいる。今でも仲の良い親友である。何でも Harvard では Charlie の実験の手早さが人の目をうばったようである。そんなわけで 1 年で M. S. のコースを終えてその翌年の 1936 年に Ph. D の学位をもらっている。世の中は相変わらず不況のさ中で卒業してもなかなか職のないころであった。当時ある大学に教職があると聞かされて申込んだが、若い彼は残念にも選にもれて他の人が行ったという話を聞かされたことがある。その後、Charlie が有名になってからその学校はたいへん残念がったということである。ともかくも Illinois 大学の Adam 教授が助手 (associate) でやとうということで奉職し、それから助教授、準教授とどんどん認められて昇進し、30 代になったときには一流学者の仲間に入って 1946 年には ACS の Pure Chemistry Award をもらっており、1946 年に 33 才でばってきされて Notre Dame 大学の Niewlands 博士の後を受けて化学科の主任 (Head) になっている。Illinois 時代にも Friedel-Crafts 反応とか芳香族化合物の親電子置換やハロゲン付加、あるいは抗マラリア剤の合成など

* Shigeru OAE 大阪市立大学教授・理博

数多い論文があるが、ポリマーに関係した仕事の多くは Notre Dame 時代で、例の Q. e もそのころ Mark 教授に招かれて Brooklyn Polytechnic Inst. に招待講義に行っている年である、8年間いた Notre Dame から去ってフィラデルフィアの Pennsylvania 大学の Chairman として home-coming したのは 1954 年で、引きつづき今年まで Chairman としてすごし、今年 Chairman をやめて久しぶりに楽しい学問一本でゆける Blanchard Professor of Chemistry という特待教授としてのみの気楽な身になっている。Penn 大では L- プロピレンオキシドよりの L- ポリプロピレンオキシドの合成などのポリマー関係の数多い報告のほか最近のチアベンゼン類のおもしろい研究や制ガン剤の合成などたくさんの仕事があり、多くの弟子を養成している。日本から行かれて研究室にすごされた人も数多く、阪大竹林教授、阪市大箕浦教授、京大(薬)奥田拓男博士、岐阜堀幹夫博士など、もう今では 10 人近い。インド、中国などの東洋人の弟子も非常に多い。

多くの化学者にとって Charles C. Price 教授は偉大な有機化学者であり、一流のポリマーケミストであり、有名な製薬化学者である。ところがまた、それ以上の多くの人にとって Charlie は世界連邦主義者 (United World Federalists) や進歩的科学者の団体であるアメリカ科学者連盟 (Federation of American Scientists) の前会長であり、平和主義のクエーカーの代表的人物である。私が Price 教授を知ったのも有機化学者の Charlie を知る前に Indiana 州から民主党の Primary に立候補して、当時マッカーシーの片棒をかついでいたジェンナーに反対して立ち上がった情熱家の Charlie である。もちろん選挙にはやぶれたが、科学が悪用されることを防ごうとし、赤退治に抗して、輝かしい化学者としての生涯を犠牲にしてまでも立ち上ろうとする勇氣に多くの心ある者はずいぶんうたれたものである。ちょうどそのころ私は Kansas 大学に留学していたが、アメリカはマッカーシズム旋風に吹きまくられており、息のつまらぬような日が続いていた。たまたま化学の講演に立ち寄られた Price 教授を一晩ひきとめて有志だけで囲んでこれから先の核兵器を含めての軍縮や平和をどうするか、それに対する科学者の使命はなどと夜ふけまで話を聞いて非常に感銘を受けたものである。ぜひ一度この先生に associate したいと希望したのもそのときである。

その後 Price 教授の associate として 1955~1957 年の 2 年間、化学は創られるものだということをずいぶん教えていただいた。がそれ以上にあちこちの化学以外の講演の相伴をして行なったりなどして人間的に学んだことが多かった。Price 教授の部屋に入って何か月かにならぬ論文の一つ書き上げ、久しぶりに discussion をしていただきに行ったことがある。ペーパーを読んでからしば

らく天井をむいていて、いきなり “Sig (私の愛称) もう君は早く僕の所から出て行かなくてはいいかん。君に教えることはない。Sooner the better だ” と言われてどぎまぎしたことがある。若い創造の期間を小生が無為に過ごしているのが気になったのだと思う。それから数日して呼出され “Advanced Organic Chemistry を講義するように” とのことで 1 学期講義をもたされた。今から思えば小生に教職を見つける下準備であったわけで、講義を大切にアメリカの大学に売り出すためにその経験をつけて下さったものである。科学は創造である。模倣はダメであり、創造は若い間に手をつけねばならぬことをしきりに言われたものである。

もし Charlie Price が化学だけにエネルギーを使っていたらノーベル賞をとくにももらっていたらということをよく聞かされる。それほど Price 教授は頭が良く、カンもするどい。けれども Price 教授が世界平和も考えないし、政治や宗教にも無関心であったらどんなに彼の魅力がなくなるであろうか。彼にとって化学の探究と同時に人間としての社会的使命を考えないわけにいかないのである。化学に国境がないごとく、世界は一つに結ばれなくてはならぬし、そのために努力すべきであり努力するのである。Chairman をやめても現在アメリカ化学会長として忙しいし、アメリカ化学会を単なるプロフェッショナルな団体のみならず、化学者の社会に対する任務や使命は何かということを考えるべきだということを、ついこの間もはっきり打ち出している。まず人間として物を考える Price 教授のような方にいつまでもアメリカ化学会を代表してもらいたいものだと思望するのは私だけではないであろう。

10 年前にはフィラデルフィアの郊外の Lansdown にある昔の奥さんのご両親の大きな家に奥さんと 4 人の女の子と末の坊やの 7 人家族でにぎやかだったが、次々と結婚して行き末の娘さんの Judy も今では Midwest の college に行っており、広い家に Charlie 4th との 3 人暮らしで淋しくなったようである。長女の Pat の主人が M. I. T. の Cope 教授の所で Ph. D をもらい有機化学者になったとうれい話を昨秋聞かされた。その折、20 年近くやっていた Chairman 稼業をいよいよやめるということも聞かされた。あるいは President になるのではなかということも考えられるので一応聞きかえしてみた。というのは今まで何度も大学の President の話があったのを知っていたからである。がこれからは biochemistry 一本で行くつもりだと言われた。でも平和問題、World Federalists の仕事はいよいよ熱心に奥さんといっしょにやっているよとのことであった。私どもの家に来られた時もひとしきりアメリカの大統領選挙の話にわいた。そのとき写したポートレートを見ながら彼が私に持って来てくれたメダルにしくんだ Kennedy coin を見比べて、私の最良の師であり、友である Price 教授の今後の活躍を祈念してやまない。